

## [論説] 伊賀上野地震で決壊した「奈良・古市村のため池」の位置推定

木戸 崇之\* (朝日放送報道局)

Estimating positions of “the reservoirs in Furuichi village, Nara” which collapsed in the Iga Ueno Earthquake

Takayuki KIDO

Asahi Broadcasting Corporation, ABC,  
1-1-30, Fukushima, Fukushima-ku, Osaka, 553-8503 Japan

It is believed that reservoirs in Furuichi village, Nara collapsed in the Iga Ueno Earthquake in 1854, claiming many lives, but they have not been identified in the past studies. For this reason, there have been confusion in which imaginary reservoirs were named as the ones which collapsed. The purpose of this study is to identify the reservoirs and spot their locations so that people in the future generations will be able to take disaster prevention measures more effectively and decisively. I have succeeded in spotting the locations of the reservoirs which collapsed by referring to ancient documents and superimposing old maps, old topographic maps, and aerial photographs. Because those reservoirs were found to be on an active fault, there is an urgent need to strengthen resistance to earthquakes of similar reservoirs.

Keywords: Pond Collapse, Active Fault, Disaster Lore.

### §1. はじめに

伊賀上野地震は1854年7月9日(安政元年六月十五日)に、木津川断層帯を震源に発生したとされる地震で、伊賀・伊勢・大和に大きな被害をもたらした。[大長・藤田(1982)]. なかでも、大和国古市では、「池われ人家多分くづれ、死人六十七人けが人数しれず残る家数三軒ばかりなり」(『聞書 大地震並ニ出火の次第』)などと伝えられ、震源断層から少なくとも十数キロも離れた場所(図1)で、人家の近くにあったため池が決壊したという被害が目を引く。

池の決壊に触れた文献はいくつか存在するものの、現地では、周辺の宅地化が急速に進み、かつて存在した池がなくなっている例もあって、どの池がどのように決壊したかが判然としなくなっている。地域住民の伝承も風化し、異なる説も流布しはじめています。本研究は、後世の防災対策に混乱を残さないために、決壊した池の特定を試みるものである。

### §2. 決壊したため池に関する既往研究

伊賀上野地震については、井上・今村(1999)が伊賀上野周辺における天然ダムや山崩れの発生をまとめたほか、『歴史地震』の1999年15号と2001年17号にいくつかの研究が掲載されている。しかし古市の被害の具体に触れたものはなく、池の決壊の実態については検討されていない。

寒川(2007)は、『西川左源太嘉永大地震記録』を



図1 震源断層と古市の位置関係[大長・藤田(1982)]. (○印は筆者が記載)

Fig. 1. Map of the positional relationship between the source fault and Furuichi village.

引き、「被害の程度については、一番は古市表で、地震とともに大池の堤が崩れて流れ出し、一四〇から一五〇軒中で、四五軒以外は残らず崩れて、死者は一一〇人」。また、磯田(2014)は、伊賀上野地震で各地のため池に被害が出たことに注目している。滋賀県甲賀市の小さな村にため池が三つも決壊したことを伝える文書があること、香川の満濃池にも被害があったことを挙げたうえで、古市の被害について調査

\* 〒553-8503 大阪市福島区福島 1-1-30 (朝日放送報道局)  
電子メール: takayuki\_kido@asahi.co.jp

を行っている。奈良県立図書情報館所蔵の藤田祥光筆写文書にある『天災地妖』より、「古市村は家数百三十軒ばかりのところ、大地震で池二か所の堤が切れ、(村人が)大地震で倒れた家の下敷きになっているその上へ、池の水、高さ八尺(2.4メートル)ばかりが出て、人を損じた。六十八人が死んだ」という部分を引用し、「古市村の悲劇は、山麓に段々畑のように、ため池を築造していたことに起因していた。地震の激しい揺れで、まず一番上のため池の堤が切れた。あふれた水は下にある池になだれ込み、下の池も連鎖的に決壊した。悪いことに、古市村ではこれらの池の下に、人間の住む集落が作られていた」と見解を述べている。いずれも、具体的な池の名前や位置については言及していない。

大長・藤田(1982)は、伊賀上野地震の発生時刻や震央を検討するにあたって、決壊したため池の手がかりとなる以下の2つの史料に注目している。

『古市村庄屋記録』は、伊賀上野地震の二度の大きな揺れと決壊の時間と対応させて池の名前を記している。「十四日夜八つ時之大地震」で決壊したのが「字竜尾池」と「字万土池」。「十五日朝五つ時之又候大地震」で決壊したのが、「其上字新池」と「北垣内之上新池」と書く。

そしてこれらの池がどのように配置されていたのかを、地震の80年以上前の明和七(1770)年に描かれた、『古市村古絵図』に求めた。決壊したとされる4つの池を、読みなどから「字新池」「字龍王池」「字まんどろ池」「字龍王新池」に結びつけて記述しているが、それを現存する池に比定したり、池があった場所を特定したりする作業は行っていない。

2014年3月に奈良県が県民の防災啓発のために発行した『歴史から学ぶ 奈良の災害史[奈良県防災統括室(2014)]』に、この被害についての記述が盛り込まれた。

本文では、『南都六月廿日出書状写』の内容に沿って、藤堂氏領分の古市で、「同所にあった奉行所が



写真1 平尾池普請の碑。横に天女を祀る祠がある。  
Photo 1. Monument of Hirao pond construction  
Beside is a shrine that worship the celestial maiden.

倒壊して役人の半数が死亡し、奉行がけがを負ったほか、在所に300余戸あった民家がほとんど倒壊して15戸しか残っていない」と集落の状況を書いた上で、「地震により池が決壊し大水が在所に押し寄せ、多くの家と人が流されたことが後になってわかりました。その規模は、死者67名とも75名以上とも、倒壊しなかった家が3戸しか残らなかったとも、400戸ほどあったが過半が潰れたとも伝えられています」と、池の被害について触れている。

本文には決壊した池の名前に関する記載はないが、本文横の添付写真に、古市の旧集落からやや離れたところにある平尾池の普請の碑(写真1)の写真を注釈無しで掲載した。本文を読んでも、決壊した池は特定できず、写真掲載の意図がよくわからない。ところが、巻頭のグラビアにも同じ写真が掲載され、こちらはキャプションに、「伊賀上野地震により決壊した奈良市古市町の平尾池。普請の碑が今も残る」とある。伊賀上野地震で決壊したのは平尾池ということになり、『古市村庄屋記録』と食い違っている。

### §3. 調査

#### 3.1 同時代史料

伊勢外宮の神官だった足代弘訓がまとめた『地震雑纂』では、発生から3日目の、六月十八日(7月12日)に届いた書状が「大和も大変、古市御座敷総倒」と、池の被害には触れていないのに対し、約一週間が経過した二十三日(7月17日)に大和郡山からもたらされた書状では内容が詳しくなり、「大和古市、二百軒許の所、五六軒残り候許故、死人あまた有之候、地震中に洪水故、流れ死候人、澤山に御座候」と、池の決壊にも触れられるようになっている。池の決壊を伴う古市の被害は、他の地域にまで広く知られるほど、衝撃をもって受け止められていたことが伺える。

しかし決壊した池について、詳しく触れた史料は少なく、先述した『古市村庄屋記録』以外見当たらない。「字竜尾池」「字万土池」「其上字新池」「北垣内之上新池」の4つの池が、2度に分かれて決壊したと書く詳細さが際立っている。

もうひとつ、幕末の志士で国学者の伴林光平が、文久二年十二月十日(1863年1月17日)の奥付がある『野山のなげき』の中でこの決壊被害に触れ、「今は九年ばかり前つきた、六月十四日の夜の地震に、大和国古市村の上手に三池とて池三つありけるが、堤崩えて次々に民家の上にたぎり落ちて大かた流れ失せぬ」とある。『庄屋記録』に出てくる4つの池の名前は出てこないが、このうち3つの池を合わせて「三池」と称していた可能性がある。

『古地震[大長・藤田(1982)]』に挿絵が掲載されている「古市村古絵図」も原本を確認した。この絵図は地元自治会に伝わるもので、『明和七年岩淵川三箇村水論裁許絵図』(図2)として奈良市史料保存館に

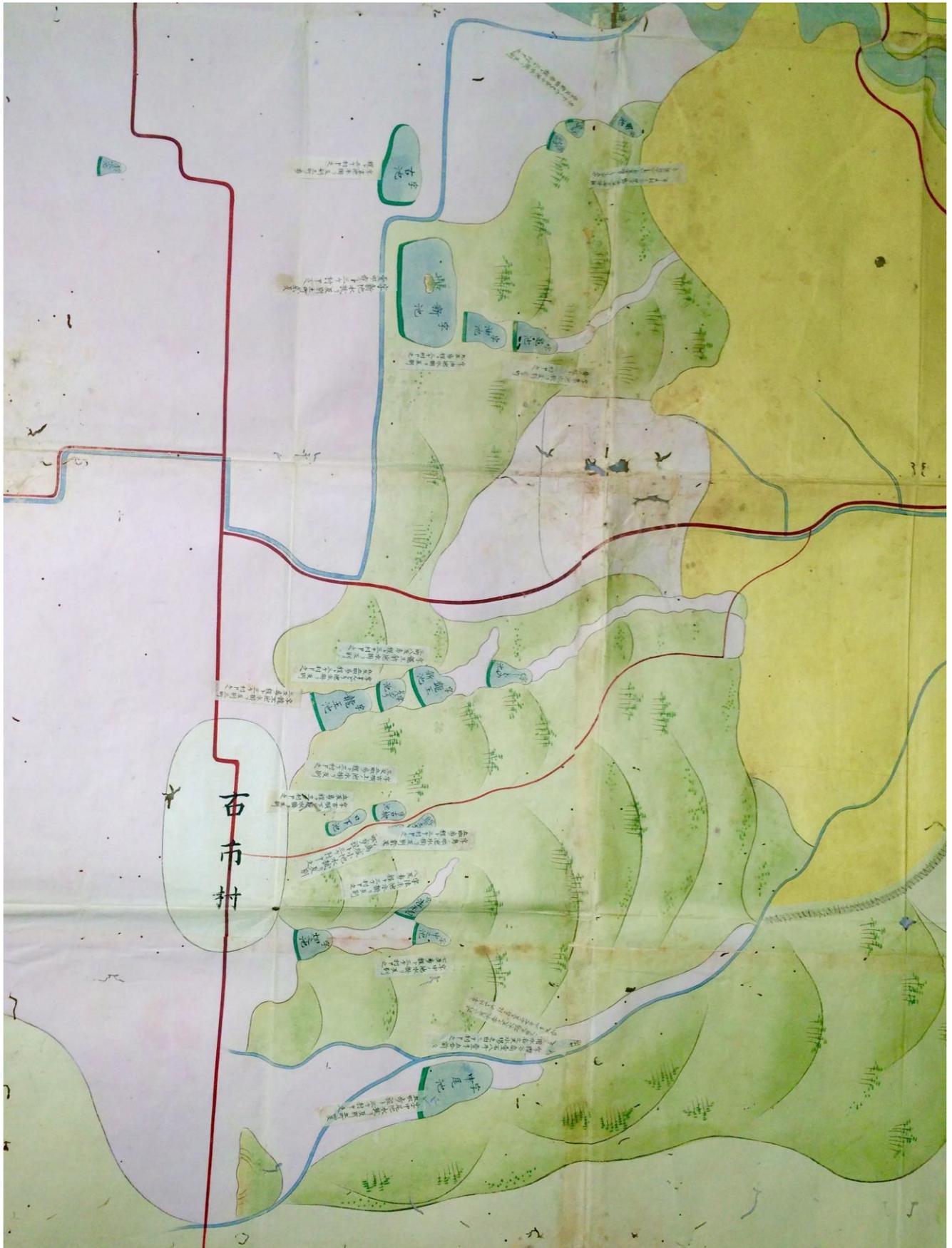


图2 『明和七年岩淵川三箇村水論裁許絵図』（主要部分）

（奈良市古市町蔵 奈良市史料保存館寄託）

Fig 2. Furuichi village old map to arbitrate water dispute. Created in 1770.

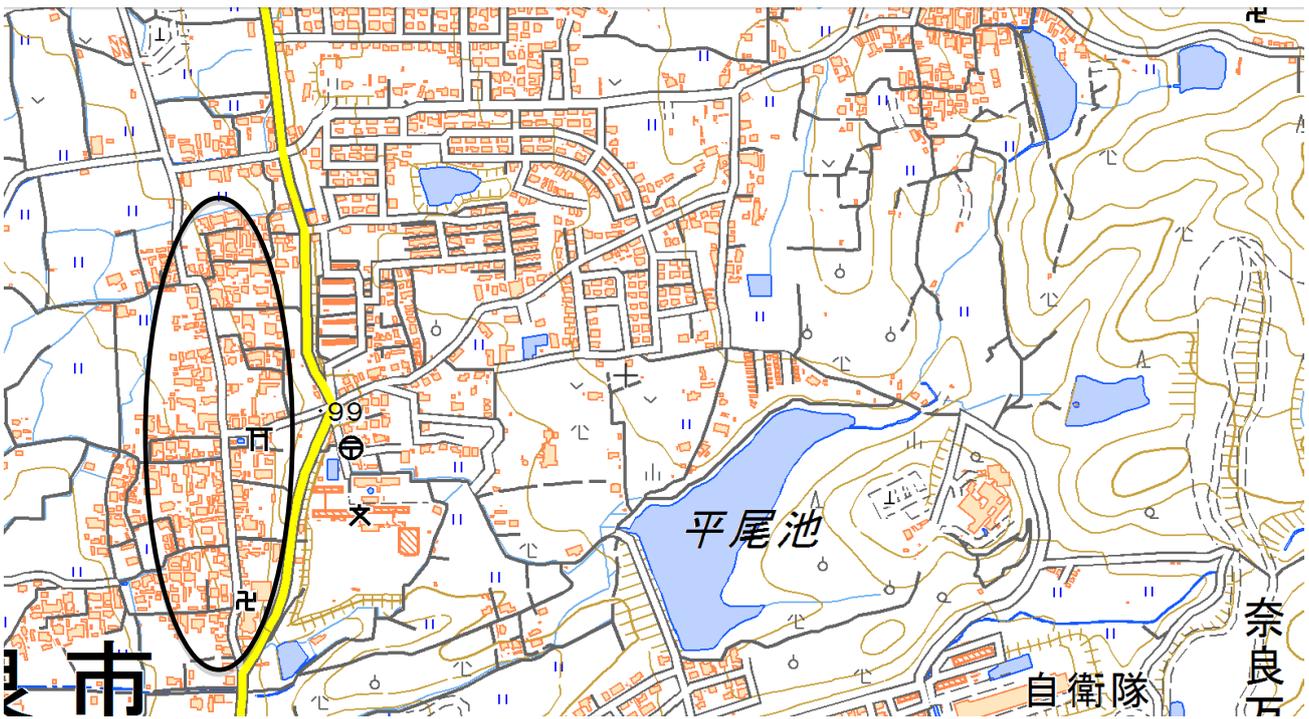
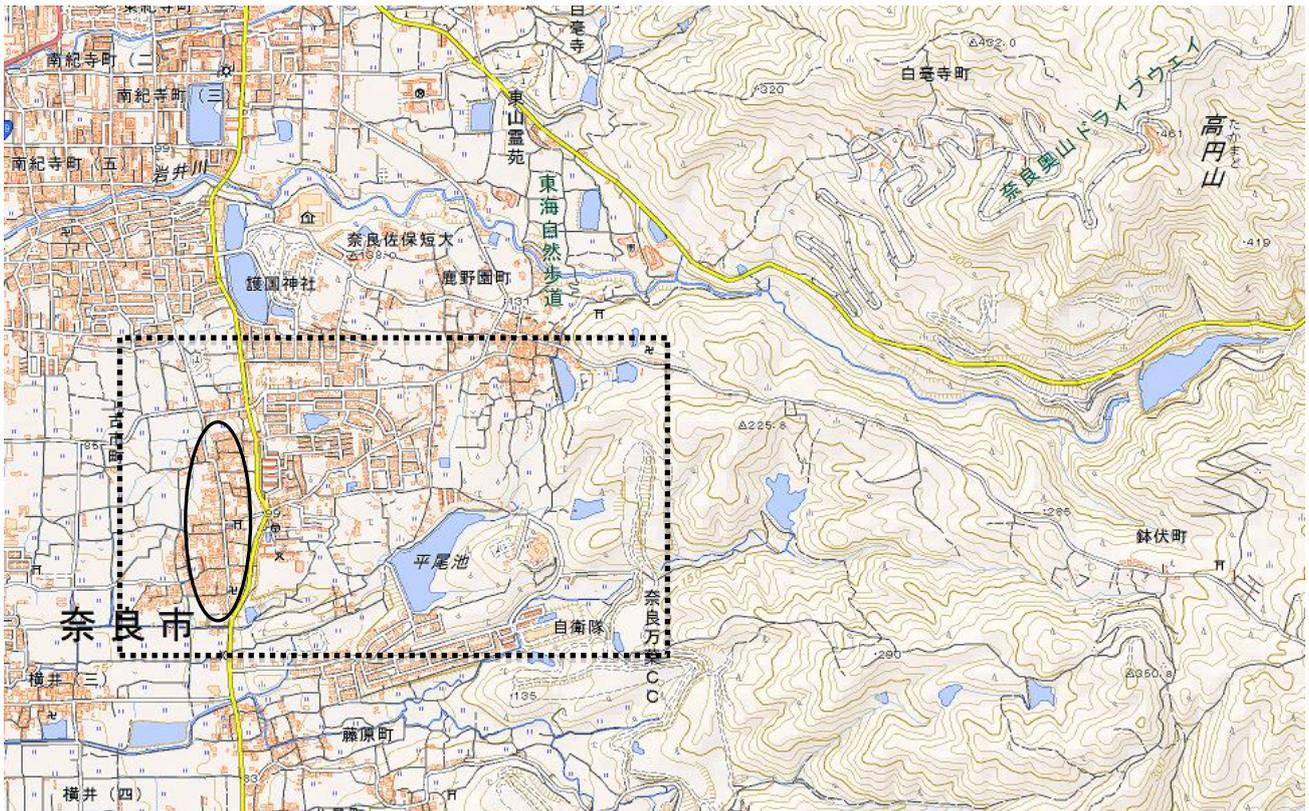


図3(a=上) 古市町付近の広域現況図 (b=下) a図四角部分の拡大図  
 ○印は図2における「古市村」に該当するエリア(筆者記載)  
 (国土地理院電子国土 Web 2016年3月情報確認)

Fig 3. Current Status of the peripheral Furuichi village

寄託されている。『古地震』に掲載されているものは、これを写したモノクロだったが、原本は3つの村域と山、川・池、道を6色に塗り分けたカラフルなものであった。縦168センチ、横146センチと大きなサイズで、池ごとに貼られた付箋には、水をどのように分配するかを記している。近くを流れる岩淵川の水争いを仲裁するために作られたもので、紙の質や贅沢な色づかいに、「二度と水争いを起こさない」という強い決意が感じられる。

先述の「字龍王池」「字まんどう池」「字龍王新池」が、至近距離で3つ並んで描かれている。一方、「平尾池」という名前の池は見当たらない。池や川の水の配分を決めるために作られたものであるため、1770年当時の池は、漏らさず記述していると考えられるが、現在の古市村近辺の池の配置とは異なる部分も多いため、どこまで現実の地形に即して描かれているかは、慎重に見極める必要があった。

### 3.2 今の現地の状況

古市町は奈良市街地の東、東大寺大仏殿から約4キロ真南にある。旧集落は、奈良盆地の田畑を西に見下ろす標高85m前後の微高地にあり、わずか2km東には標高461mの「高円山」が迫っていて、まさに盆地東縁部にあたる。集落のすぐ東側を南北に走る県道は、旧集落より10mほど高くなっている。さらにその東側は10メートル前後急に高くなっていて、その上に緩やかな斜面の扇状地を造成した新興住宅が建っている(図3)。

山から湧き出る谷水を堰き止めた平尾池は、古市地区に現存する最も大きなため池で、平地との比高差もあるため、仮に決壊すれば水の勢いは相当なものになることは間違いない。しかし、地形的に古市の旧集落に洪水が押し寄せるとは考えにくい位置にあ

り、『歴史から学ぶ 奈良の災害史』の記述には疑問が残る。写真の石碑を確認しようと現地を訪れたが、風化が激しく、筆者には碑文を読み取ることができなかった。

「古市村庄屋記録」は、池の決壊による被害が大きかった箇所として、「中ニも北垣内者字竜尾池并字万土池等堤切れ候二付…」「北垣内之上新池トモ堤切…」などと、北垣内という地名を繰り返し挙げている。現在の古市周辺でこうした町名は見当たらなかったが、古い字名を詳細に記録した『大和国条里復元図』[樫原考古学研究所(1981)](図4)で、古市の旧集落の北端に「北垣内」を確認することができた。その東の谷筋には、同じく現在は使われていない「竜王谷」や「新池」「慈恩堂池」などの字名も見える。

『大和国条里復元図』のベースに使われているの



写真2 「竜王谷」に唯一現存する鐘池。

Photo 2. Kane-ike is a pond that only existing in Ryuo valley.

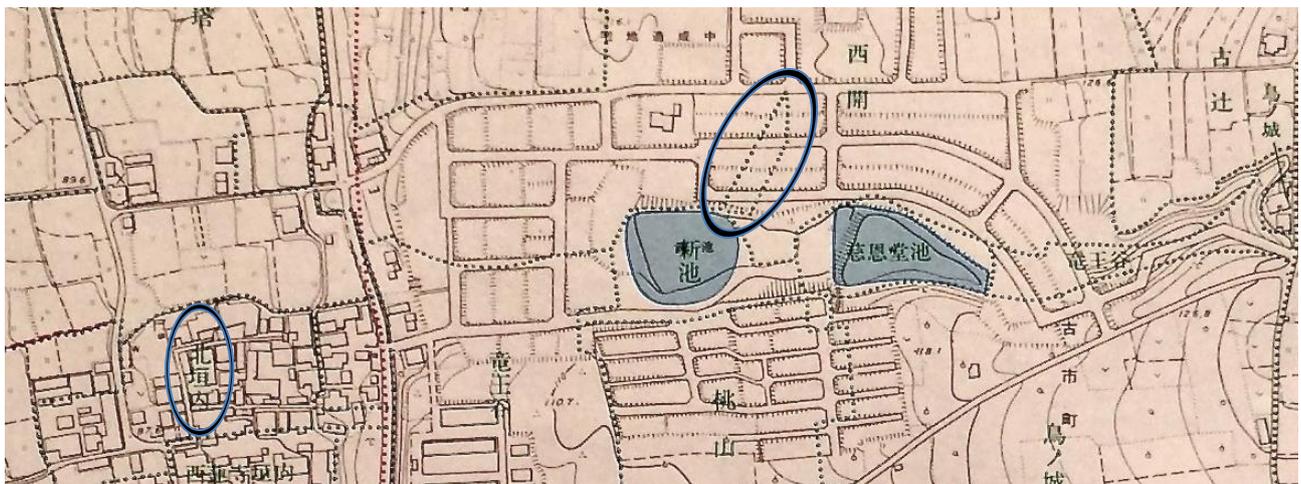


図4 『大和国条里復元図』[樫原考古学研究所(1981)]. 少し大きめの文字で書かれているのが旧字名  
基本図は『大和平野広域都市計画図』[奈良県土木計画課(1972)]. (○印は筆者が記載)

Fig. 4. Map of Nara that restore the old land subdivision. The old place names are written in large character.  
Underlay of the map is the national large scale map of 1972. Circle described author.

表1 宮本鉄司氏宅に伝わる平尾池の由来.

Table 1. Historical fact of Hirao pond construction that's known to residents.

<p>平尾池由来略記</p> <p>嘉永六丑年早魃ニ依リ藤堂藩古市出張所平尾池地築造ヲ          發議セラレ翌安政元年正月起工セラレシモ同年六月十四日          震災アリ</p> <p>古市其被害最モ甚ダシイ 家屋倒壊シ且用水池堤塘ノ決壊          アリ 一時ノ出水ノ為人畜ノ死傷又□多 為ニ平尾池築造          工事一時中止 住民震災後始末ニ従事 翌安政二年震災          後片付一段落スルヤ中止ナリシ築造工事再開翌安政三辰          年再ビ大早魃ニ遇ヒ石高千石ニ對シテ実收穫僅カニ悪米ニ          十石余ナリ 引続キタル再三ノ災害ノ為住民ノ困窮其の極          ニ達シタルモ幸ヒ藤堂藩主ノ理解アル特別扱ヒニ依リ本工事          ハ継続セラレ翌々安政五年戊午五月池敷二町四反九歩 堤          防敷七反一畝二十歩 満水時廣サ東西百五十間 南北百          間 深サ七間 周圍八町余ノ現平尾池竣□総工費銀一百          十九貫(銀一匁 二十五錢トシテ二万九千七百五十円)          而シテ本工費ノ半額ハ藩主ノ補助 残り半額ハ十五年月賦          年 二三朱ノ利息ニテ藩主ヨリ借入 爾来明治四年ニ至ルマデ          年賦償還ヲナシタルモ廢藩置県ニ際シ藩主ノ好意ニ依リ残余          ノ債務ヲ免ゼラレタリトイフ而シテ池畔ニ一社ヲ建立 天女          ヲ祀リ水福ヲ禱リ且ツ本工事竣工ヲ永遠ニ記念スル為一碑          ヲ建立セラル</p>
---

表2 平尾池普請の碑文.

Table 2. Inscription of Hirao pond construction monument.

<p>碑文</p> <p>平池之山距古市不遠之山間水脈纒通甲寅          之春村吏請下池焉以防旱災          官許之大司農深井君司農山本久世三宅          君使署吏廣瀨中川森三子掌其事數年          而成日其池曰平尾村人相慶曰今後可無          早魃之患又祀天女ヲ池畔以禱水福云          自非四君恤民之深與三子及邨吏之能奉          其意恐不能為此舉也邨吏等請勒石以傳          諸不朽故余述其要傳爾</p> <p>安政五年戊午夏六月 古市医生信尺撰並書</p>
--

### 3.3 地元での伝承

2015年3月26日に、古市町の自治会長を務める高西保徳氏に依頼し、古老をはじめ、住民十数名へのヒアリングを行った。伊賀上野地震の被害やため池の決壊については、多くの人が「先祖から聞いている」と話すものの、決壊した池の場所などについて、詳しく聞いたことのある人はいなかった。

現存する「鐘池」のことを「あたらし池」と呼ぶ人もいるということ、旧字名の名残はあるようだ。また、宇慈恩堂池に描かれている池は、「じょんど池」や「じょんじょ池」と呼ばれていたということである。「じょんど池の上流側に沼地のようにになっていた場所がある」と語る住民もいて、決壊した「三池」は、「あたらし池」「じょんど池」「沼地」ではないか、と考える人もいた。

一部の住民は、古市町内の宮本鉄司氏宅に伝わる古文書の中にある『平尾池由来略記』(表1)の写しを共有し、その由来を確認していた。これには「嘉永六(1853)年丑年早魃ニ依リ藤堂藩古市出張所平尾池築造ヲ發議セラレ翌安政元年正月起工セラレシモ同年六月十四日震災アリ」「平尾池築造工事一時中止 住民震災後始末ニ従事 翌安政二年震災後片付一段落スルヤ中止ナリシ築造工事再開」と書かれており、伊賀上野地震が発生した時には、平尾池はまだできていなかったことがわかった。

また、『奈良の災害史』に写真が掲載された「平尾池普請の碑」についても伝承があり、風化して読めなくなっている碑文の内容を知ることができた(表2)。

は 1972 年に奈良県土木計画課が県下各市町の国土基本図を集成して作った『大和平野広域都市計画図』である。「新池」という字名の位置には、鐘池という池が描かれ、今もなお現存している(写真2)。さらに地図には「鐘池」の上流側、「慈恩堂池」という字名のところに名前の無いやや細長い池が描かれているが、この池はすでに埋め立てられ、宅地になっている。

「数年にして成る。その池を曰く平尾と曰う」という文面からは、竣工までに数年かかったことが読み取れ、末尾の「安政五年戊午夏六月」の刻字が竣工の日付であれば、地震当時この池は築造中で、決壊する状況でなかったことが判明した。

#### § 4. 「竜王谷」の状況

伴林光平が「三池」と称し、伊賀上野地震で決壊した池は、かつての「北垣内」東側の谷筋、いわゆる「竜王谷」にあった可能性が高くなった。その位置は、県道の春日苑住宅バス停の東側あたりと考えられるが、鐘池が残っている以外に、谷を実感できるような明瞭な地形や、かつてのため池やその堤の跡がはっきりわかるような起伏を感じることはできない。そこで池の正確な位置を探るために、過去の地形図や航空写真を遡る手法を取った。

#### 4.1 旧版地形図による推定

『明和七年岩淵川三箇村水論裁許絵図』(図5)の竜王谷部分には、集落に最も近いところから、「竜王池」「まんどう池」「竜王新池」「はじどの池」と、4つの池が並んでいるが、「慈恩堂池」あるいは「じょんど池」という記載はない。古い字名を重視すると、かつての「字新池」に現存する鐘池が「竜王新池」であると考えるのが自然である。だとすると、じょんど池は「はじどの池」であり、鐘池の西(下流)側に「竜王池」と「まんどう池」の2つが存在した可能性が出てくる。しかし地元でのヒアリングでは、古老を含め、ここに池があったことを証言する人はいなかった。

『明和七年岩淵川三箇村水論裁許絵図』では、「竜王新池」の上手で、北側に枝分かれする谷筋があり、これをにおわせる字界が『大和国条里復元図』(図4 筆者記載の右側の○印)にも書かれている。この谷筋がどのようなものがわかれば、決壊した池特定の手がかりになると考えたが、『条里復元図』の基本図である『大和平野広域都市計画図』が作られた1972年の段階ですでに周囲は宅地造成されているため、さらに古い地図などにその痕跡を求めた。

最適なのは、ため池が決壊する直前の絵図、地形図などを参照することだが、適切な縮尺の地図は見当たらない。『明治前期関西地誌図集成[柏書房(1989)]』に古市を収録した「大和郡山」という図幅があるが、縮尺が1/25000で池の詳細は判然としない。

そこで、地形図としては1968年に作成された5000分の1の『国土基本図 6-OD-96』(図6)を参照した。わずかに数年の違いであるが、1972年の地図(図4)に見られるような池周辺の宅地造成はまだ行われていない。鐘池の東(上流)側には、明和七年の絵図にあるものに符合する北に分岐する小さな谷筋が見えるほか、西側には、竜王谷に沿って形の整わない2枚の田んぼがあり、ため池の痕跡に見えなくもない。

#### 4.2 航空写真による推定

さらに遡って参照できたのは、終戦直後に米軍が撮影した航空写真(写真3)である。モノクロではあるが、当時の地形がよくわかり、1968年の国土基本図(図6)に描かれている鐘池下流の田んぼは、写真を見ると少しびつな形をしていることに気づく。

谷筋のため池は通常、池の下流側に人工的な堤を築いて水を堰き止める。池の形は流れ込む上流側が狭く下流側が広い、三味線の“撥”を逆さにしたような形になる。鐘池も、かつて存在したじょんど池(慈恩堂池)もそのような形になっていて、谷筋に沿って池が連続してある場合は、水面の幅が、広がってはまた狭まり、堤のところでまた広がるという形状になる。鐘池のすぐ下流側の田んぼは、これと同じように上流側が狭く、下流側が広い形をしており、かつては池だったと考えることができる。またその下流側には、上空から見る限り3本の畦でわけられた4枚の田んぼがあるように見えるが、このうち3枚目の下流側の幅が広がり、4枚目の上流側はこの幅より狭くなっているため、ここにも、池の堤があったと考えることが可能である。

この航空写真を、図5の明和七年の絵図と比較すると、丘陵部分と農地、集落の境目や集落のなかでカギ型に折れ曲がる道などが、かなり忠実に書かれていることがわかる。また、先述した「竜王新池」の上手で、北側に枝分かれする谷筋が航空写真でもはっきり確認できることから、この絵図は実際の地形に沿ってきっちり描かれていると考えられる。よって、今はなくなってしまった「まんどう池」と「竜王池」があったのは、鐘池の下流側であると推定することができる。

#### § 5. 考察

##### 5.1 決壊の順序と、もう一つの「新池」

「古市村庄屋記録」によると、「十四日夜八つ時之大地震」で決壊したのが「字竜尾池」と「字万土池」。「十五日朝五つ時之又候大地震」で決壊したのが、「其上字新池」と「北垣内之上新池」ということであった。これが正しいとすると、いわゆる「三池」については、最初の地震で、今回位置が判明した下の2つの池が決壊し、その数時間後に再び襲った大きな揺れで、上流側の1つが決壊したということになる。

残るひとつの「其上字新池」は、旧集落の北端からさらに300mほど北側にある、今の「鳴池」がそれにあたるということである。現在の護国神社の入口横にある大きな池で、『明和七年岩淵川三箇村水論裁許絵図』(図2)では「字新池」と描かれている。真ん中に小島があることから、鳴池とよばれるようになったと伝わる。地元の建設関係者が池の脇の農地を重機で掘り起こしたところ、泥など、他とは明らかに異なる性質の土砂が入っていたという証言も確認されている。奈良市史料保存館には、当時の古市村が、決壊した池を修復するにあたり、土地の供出や、作業にかかった

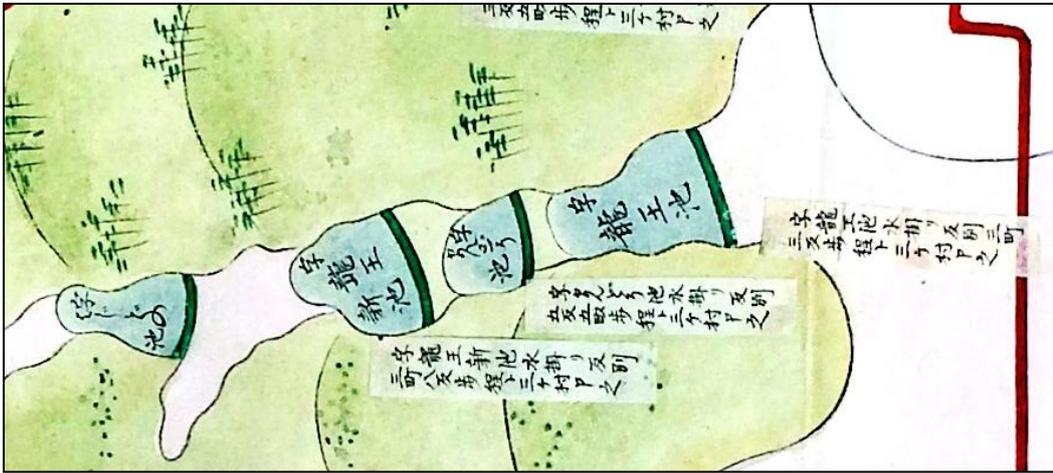


图5 明和七年岩淵川三箇村水論裁許繪図 [奈良市古市町蔵(1770)].

Fig. 5. Furuichi village old map to arbitrate water dispute. Created in 1770.



写真3 USA M85-1 85 (米軍 1948年9月1日撮影).

Photo. 3. Aerial photograph by U.S.Army 1948.

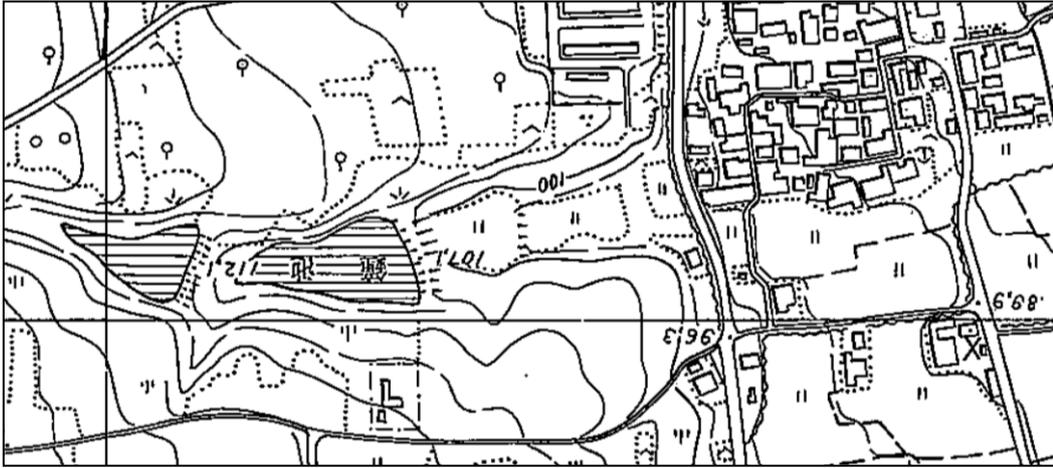


图6 1/5000 国土基本図 (6-OD-96) [国土地理院 (1968)].

Fig.6 The national large scale map Created in 1968.



写真4 CKK20083 C8 12 (国土地理院 2008年5月15日撮影).

Photo 4. Aerial photograph by Geospatial Information Authority of Japan 2008.

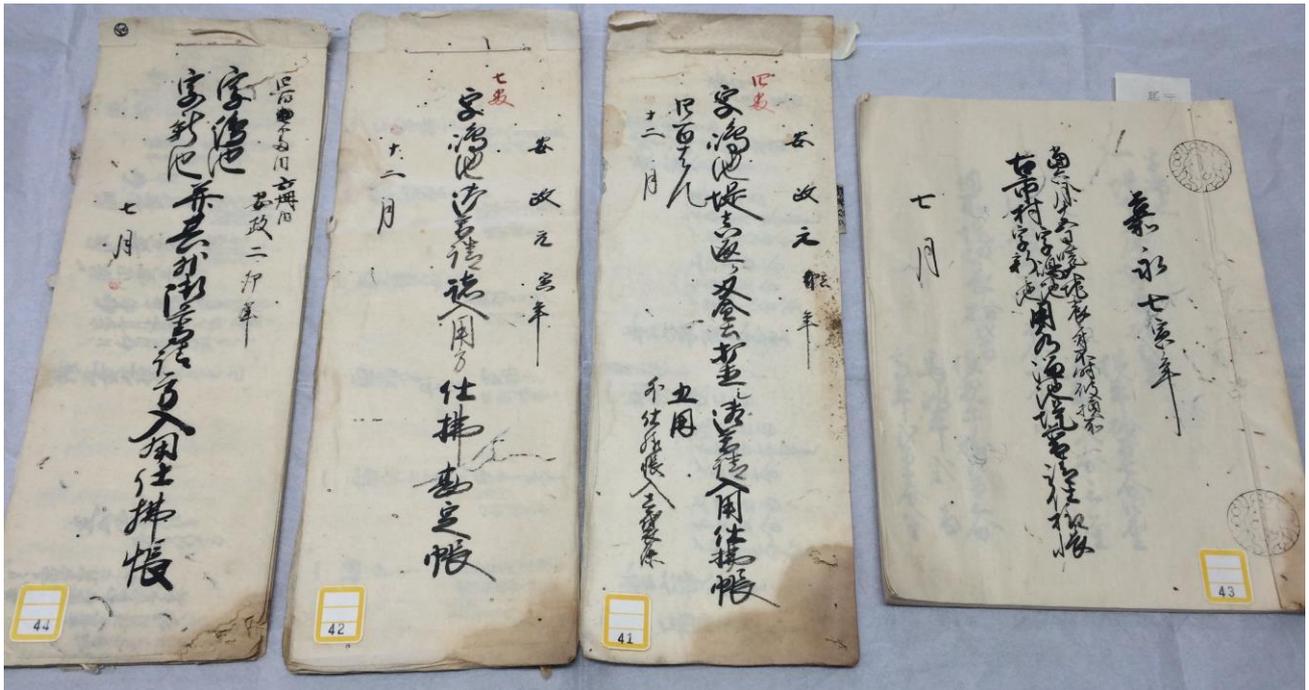


写真5 地震で被災した池の修復に関する資料。(奈良市古市町蔵 奈良市史料保存館寄託)  
「新池」「嶋池」の2つの池の名前が見える。

Photo 5. Documents related to the repair of collapsed “Shima-ike” and “Atarashi-ike” ponds.

人手の数などを記録した、嘉永七年から安政二年にかけての資料(写真5)も残されていて、修築した池の名前として「新シ池」「嶋池」という2つがみられる。「其上字新池」と「北垣内之上新池」という2つの「新池」を同時に修築するにあたり、混乱を避けるために新しい名称をつけたと考えられるが、定かな理由は不明である。また「竜尾(龍王)池」や「万土(まんどう)池」の修築に関する資料は見当たらない。同じく奈良市史料保存館に寄託されている明治十三(1880)年の地籍調査図と、大正七(1918)年の里程調査図には、2つの池は存在していないことから、この被害の後、ため池として復旧されなかったとみられる。

## 5.2 決壊と被害拡大の原因

これらの池は、なぜ決壊するに至ったのか。『都市圏活断層図(桜井)』によると、決壊した3つの池は、奈良盆地東縁断層帯の天理撓曲のほぼ直上にある(図7)。伊賀上野地震は、これとは異なる木津川断層帯が引き起こしたと考えられてはいるが、地質の影響で揺れが増幅し、池堤の決壊につながった可能性もある。活断層近傍のため池は国内至るところにみられることから、堤防の破壊メカニズム研究の進展と耐震性向上に向けた対策の強化が望まれる。

しかし、決壊した池は面積も小さく、水深もさほどではなかつたろう。なぜこれらの池の決壊が文献に特筆され、広く伝わったのかは疑問の残るところである。

地震が発生したのは梅雨時であった。「歴史天候デ

表3 伊賀上野地震発生前の気象状況(京都)。  
('歴史天候データベース・オン・ザ・ウェブ')をもとに作成 表の日付は西暦で記載

Table 3. Weather conditions at Kyoto before the Iga Ueno earthquake.

	良い方	悪い方		良い方	悪い方
6/21	晴れ	晴れ	7/1	晴れ	晴れ
6/22	晴れ	晴れ	7/2	晴れ	雨
6/23	雨	雨	7/3	晴れ	雨
6/24	曇り	雨	7/4	雨	雨
6/25	晴れ	小雨	7/5	晴れ	曇り
6/26	晴れ	小雨	7/6	晴れ	曇り
6/27	晴れ	晴れ	7/7	晴れ	大雷雨
6/28	晴れ	大雷雨	7/8	晴れ	曇り
6/29	晴れ	雷雨	7/9	晴れ	大雷雨
6/30	曇り	曇り	7/10	晴れ	にわか雨

ータベース・オン・ザ・ウェブ」[吉村(1993)]

(<https://tk2-202-10627.vs.sakura.ne.jp>)は、『北小路家日記』『杉浦家歴代日記』『速見家日記』を参照し、この時期の京都の天候を記録している(表3)。これによると、地震の発生前、20日間の天気は雨が続いてきたと見ることもでき、池の水は増えていた可能性がある。しかし、ある日記で「大雷雨」と書かれた日に、別の日記の記述が「晴れ」となっているなど、複数の日記で天気の記述が一致しておらず、明らかに集中豪雨や長雨と呼べるようなものではなかつたと考えられる。

では、ため池の上流で土砂崩れや土石流が発生し、その影響がこれらの池に及んで、水が津波のように村に押し寄せた可能性はないだろうか。上流の鹿野園村にも古くより大きなため池があり、その上流には狭隘な沢地形が続いている。沢沿いには、土石流の危険があるとして土砂災害警戒区域に指定されている箇所もあり(奈良県砂防災害対策課ホームページ <http://sabo-yr-etsuran.pref.nara.jp/assets/pdf/toshon/nara-rokuyaoncho-001-J-Y-INIT.pdf>)、地震によって土砂災害が発生する恐れも否定できない。鹿野園村の歴史は古く、沢沿いには旧家もあるため、もし大規模な土石流が江戸末期に起こったとすれば何らかの伝承が残っていると思われるが、筆者が調べた限りではそうした記録は見つかっていない。

古市村の大きな被害は、池の決壊によってのみ引き起こされたものではなく、その大半は地震の揺れで家屋が多数倒壊したことが原因であって、濁流が流れ込んだのはその一部である可能性もある。複合災害の異様さが目撃者にショックを与えたとすれば、文献に特筆されたことも不自然ではない。池と集落の比高差を考えれば、『天災地妖』が記述した「池の水、高さ八尺(2.4メートル)ばかり」は水位ではなく、集落到に堆積した土砂の高さだった可能性もある。詳細な原因解明のため、考古学的な調査が待たれる。

## §6. まとめにかえて

東日本大震災では、福島県須賀川市で農業用ダムが決壊し、7人が死亡し、1人が行方不明になる被害があった。地震の際、ため池にはこうした危険があることをテレビ番組で伝えるために、伊賀上野地震の奈良・古市村の被害事例を紹介しようと、リサーチを行っていた時に生じた疑問がきっかけとなった。

木村は、地域の防災力を高めるには「わがこと意識」の醸成が必要であり、その意識を高めるためには、現実性と地域性・人間性の3つの要素を知ることが重要だと指摘する[木村(2014)]。自分の住む街で過去に実際に起こったことを遡る災害史は地域性が非常に強く、「わがこと意識」につながる大きなファクターである。今回奈良県が、『歴史から学ぶ 奈良の災害史』を刊行し、後世に継承すべき、地域の災害の歴史をまとめたことは、大いに評価に値する。

だが一方でその内容に誤りがあると、現実には起こりうることとの矛盾が生じ、「現実性」が乏しくなって、「わがこと意識」の醸成効果が減衰するおそれがある。決壊したのが平尾池であるか、そうでないかは、一見大きな問題でないように見えるが、決壊したとされる4つの池のうち2つは既になくなっており、周囲の宅地化も進んでいる中で、過去の被害を知らない住民も増えている。後世の人々が防災対策を行う際に疑念を抱かせないようにするために、少なくとも県のホームページ上で公表している『奈良の災害史』

(<http://www.pref.nara.jp/secure/118509/naranosaigaisi1%E3%80%80gravure.pdf>)の記述内容を修正し、正しく伝えられることを期待したい。

## 謝辞

本研究におきましては、奈良文化財研究所アソシエイトフェローの中川二美さん、主任研究員の馬場基さん、奈良市埋蔵文化財調査センター所長の森下恵介さん、総合地球環境学研究所の鎌谷かおるさん、近畿大学総合社会学部の金井啓子さん、また本学会員の寒川旭さん、西山昭仁さんより、資料のご教示や具体的なアドバイス、ご協力をいただきました。また、桑原史子さんはじめ、奈良市史料保存館のみなさん、古市町自治会会長の高西保徳さんはじめ、古市町の住民のみなさまには、調査にご協力を賜りました。また、査読者の井上公夫さん、編集委員長の林豊さんのご助言により、考察をより深めることができました。厚く御礼申し上げます。

対象地震:1854年伊賀上野地震

## 文献

- 磯田道史, 2014, 天災から歴史を読みなおす, 中公新書, pp141-147.
- 井上公夫・今村隆正, 1999, 高田地震(1751)と伊賀上野地震(1854)による土砂移動, 歴史地震, vol15, pp.107-116
- 大長昭雄・藤田和夫, 1982, 安政元年六月の伊賀上野地震—連動したか? 活断層, 「古地震 歴史資料と活断層からさぐる」, 萩原尊禮編, 東京大学出版会, pp231-250.
- 檀原考古学研究所, 1981, 大和国条里復元図, 28号図.
- 柏書房, 1989, 明治前期関西地誌図集成「大和郡山」.
- 木村玲欧, 2014, 戦争に隠された震度7, 吉川弘文館, pp69-70.
- 国土地理院, 1998, 1:25000 都市圏活断層図 桜井寒川 旭, 2007, 地震の日本史, 中公新書, pp170-171.
- 伴林光平, 1863, 野山のなげき, 頁不詳.
- 奈良県防災統括室, 2014, 歴史から学ぶ奈良の災害史, pp10-12.  
<http://www.pref.nara.jp/secure/118509/narano saigaisi1%E3%80%80gravure.pdf>
- 奈良県砂防災害対策課ホームページ  
<http://sabo-yr-etsuran.pref.nara.jp/assets/pdf/toshon/nara-rokuyaoncho-001-J-Y-INIT.pdf>
- 吉村 稔, 1993, 歴史天候データベース・オン・ザ・ウェブ, <https://tk2-202-10627.vs.sakura.ne.jp>

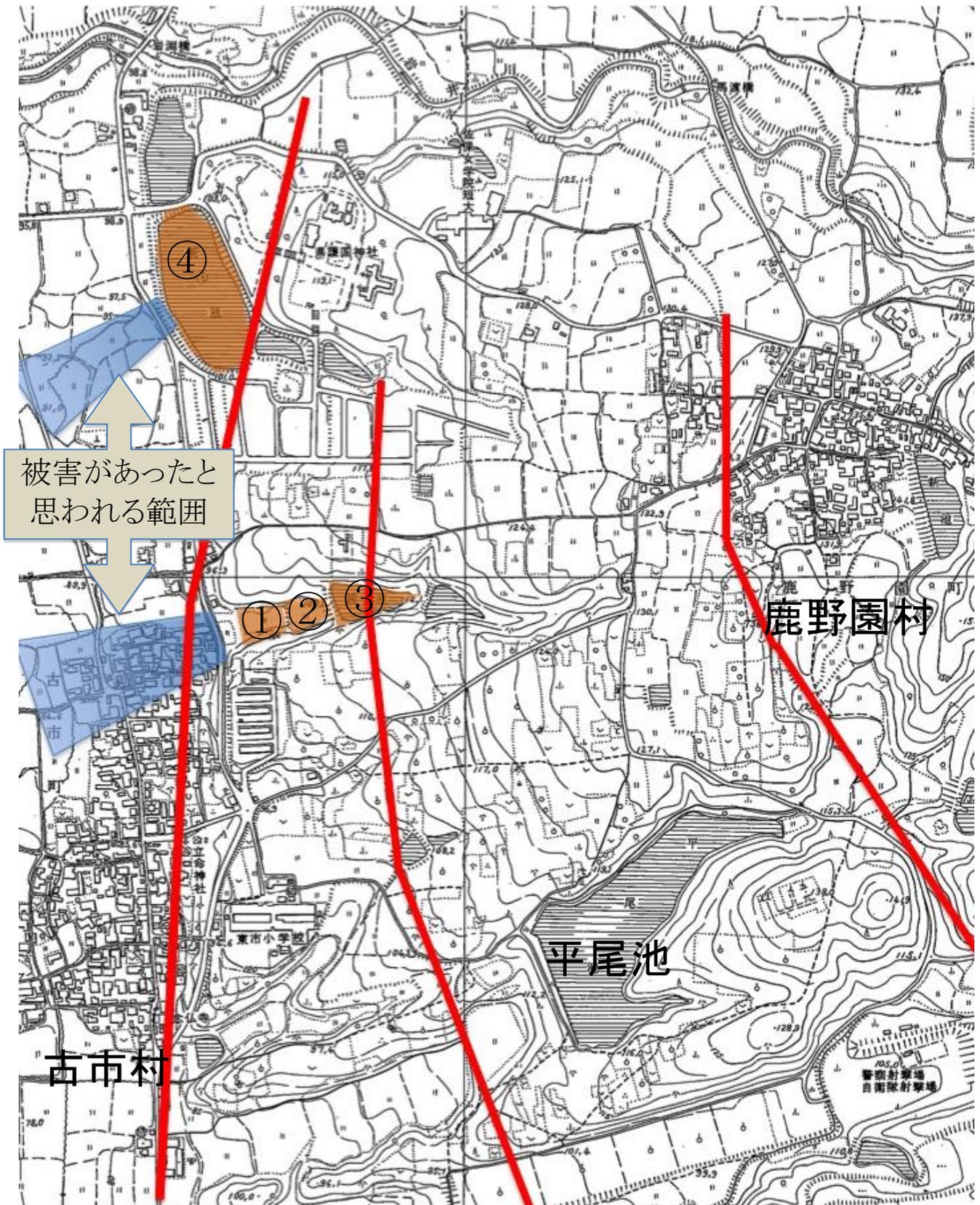


図7 古市付近の広域図 (1/5000 国土基本図 6-OD-96 [国土地理院(1968)])。

①～④は決壊したと考えられる池跡。線は奈良盆地東縁断層 天理撓曲を「都市圏活断層図 桜井[国土地理院(1998)]」を参考にプロットした。

Fig.7 Wide-area view of the periphery of Furuichi. (The national large scale map Created in 1968.)

Collapsed ponds are No.1 to 4. Lines are active faults.